

随想

外科治療における今後の展望

侵襲学関連分野の統合を —外科臨床のさらなる進歩をはかるために—

小川 道雄

Michio Ogawa

(総長)

市立貝塚病院

『Surgery Frontier』誌創刊のころ

「一般外科医に必要な手術と周術期管理のための新しい雑誌を作りたい」とメディカルレビュー社の松岡光明社長が熊本大学の教授室に来訪されたのは、22年前の1993年6月8日のことである。話は大いにはずみ、外科臨床の基礎となる侵襲学を確立したいという筆者の考えに賛同していただいたので、お受けすることにした。その日のうちに編集方針と編集委員にお願いしたい先生方を決めた。

翌1994年6月に『Surgery Frontier』誌第1号が刊行された。巻頭に筆者の考えてきたことを、「創刊のことば」として載せてもらった。読み返してみると、この考えは22年前と全く変わっていないので、少し長くなるが引用しておく。

『外科的治療はすべて生体への侵襲を伴う。生体は侵襲に対して、それが体外からの侵襲であれ、あるいは悪性腫瘍のように体内に発生するものであれ、その内部環境を守り、生体の恒常性を保つためにならず生体防御のための反応を起こす。

これまでも侵襲学の研究成果は直ちに外科臨床の進歩につながってきた。輸液、栄養、免疫、感染対策など、すべてがそれである。その結果、従来到底不可能と考えられてきた過大な手術も可能となり、また poor risk 患者に対する手術適応も著しく拡大されてきた。

近年この侵襲学はさらに飛躍的な進歩を遂げている。それは生体が侵襲に際してそれを伝えて生体反応を惹起するための情報伝達システム、すなわちサイトカインや接着分子による免疫制御機構の解明が急速に進んでいるためである。これを応用して、手術、外傷、感染、腫瘍、移植などの生体への侵襲をさらに軽減し、外科的治療をより安全に行うことが可能となりつつある。

最近の外科臨床では、外科学に必要な art and science のうち、やや art の方に力点がおかれ過ぎているように思う。若い外科医が art の眩い輝きに惑わされて、ともしれば周辺